

<レベルアップ研修会報告>

・報告者…研修部・阿部徹

○演 題 「民具研究の視点から見たアイヌ民族の自然利用」

○講 師 北海道博物館研究職員 大坂 拓 氏

○日時・会場 令和2年2月22日(土)午後13時30分～3時、自然ふれあい交流館

講演は、講師の自己紹介から始まり、終始和やかな雰囲気の中で進められました。講師の大坂氏が、樹木から樹皮をとり煮たり晒して作った繊維とか、自ら編んだり購入した荷縄や籠、刀帯なども見せていただき、お話とつながってとってもわかりやすかったと思います。今回の報告は概要報告であり、私が聞いてわかったことや感じたことを中心にまとめました。講演された内容の全部のことにはふれていません。以下、大きく4点に分けて報告します。

1. アイヌの人々は何から繊維をとっていたのか

動物性では、シカ、アザラシ、クジラなどの動物の腱から。植物性は、樹木ではオヒョウ、ハルニレ、シナノキ(アカジナ)、オオバボダイジュ(アオジナ)、ツルウメモドキ、その他(ヤマブドウなど)。草本では、エゾイラクサ、ムカゴイラクサ、その他(ガマ、ハマニンニクなど)とのことでした。ハマニンニクは別にして、あとの植物は野幌森林公園でもよく見かける身近な植物であり、アイヌの人たちはそれらを上手に利用していたことがわかりました。

2. どの様にして植物から繊維をとったのか

(1) シナノキ、オヒョウの場合

- ①主に、6月頃に樹皮を剥いできれいな沼につけるか、木灰ないしは苛性ソーダーで煮る。
- ②樹皮を剥ぐ木は、煙突位の太さの木。太い木だと繊維が硬く折れやすい。外皮は取る。
- ③6月から7月が、沼につけておくちょうどいい水温。固い樹皮ののり状の部分が水中で徐々に分解される。一週間位したら様子を見に行く。
- ④沼から引き上げ、乾かして細かく裂いた繊維をよって糸にする。それから紐や織物とした。

(2) ツルウメモドキの場合

- ①2月頃、ツルウメモドキをとってきて、外皮を少しあたためながら剥ぎ内皮をとる。
- ②緑色をした内皮を鍋で煮てから、2～3日堅雪の上で寒ざらしすると真っ白になる。
- ③重ならないように広げて、一週間もすれば全体が真っ白に仕上がる。

繊維としての強度や性質はシナノキの方が強いが、柔らかく使いやすさではオヒョウの方だったので、オヒョウの方は衣服用として愛用されていたとのこと。ツルウメモドキは、アイヌの人々が利用する繊維で一番強く柔軟性があり水にも強かったので、弓の弦や下帯、荷縄など肝心なところに使っていたとのこと。素材に応じた使い分けがされていたことわかりました。また、アイヌの人々は自然を大切にするので、木を切り倒さないで一部の皮だけを取ったと言われていたが、これは「噂話」であるとのこと。実際には、多くの地域で樹皮を丸ごと剥いていたとのこと。これにはビックリ、私も観察会でそんな話をしたことがあったので、これから訂正しようと思いました。

3. 民具の事例⇒荷縄の使い方と年代と地域による違いについて

(1) 使い方…荷縄は、額に当てる部分と縛り付ける縄からなっている。

- ①4～6m程度の長さのものは、まき拾いなどに使う。頭や胸にかけて物を背負った。
- ②挨拶をする時には、額ではなく胸にかけて使った。

③子ども使う子守り用のものには、子どもが腰かける棒がついていた。

④日常用とお葬式用では形態が違う。日常用は強度が必要、葬儀用は全体に小さい。

(2) 年代と地域による違い

①製作技法の違いで、北海道の荷縄は端から端まで1本で編まれているが、サハリンや千島列島の荷縄は額と縄の部分に分けた2部構成で編まれている。

②1950年代には、和人の影響から木綿布を緯糸（横糸）とするものが出現。1970年代には、新しい編み方による刀帯や死者用靴が出現した。

荷縄について、全道各地の年代や用途の違いを沢山の資料をもとに説明していただきましたが、この部分のお話は正直私にとっては難解でした。アイヌの人たちが使っていた荷縄の形態は、北海道とサハリン・千島列島では違うこと。和人の影響やアイヌの人々の間で伝統技法を伝える人の減少が、荷縄の作り方の変化となったことはわかりました。

4. 質疑から

(1) トンコリ（五弦琴）の弦は、ツルウメモドキなのか。いい音が出ないので…。

⇒博物館にあるトンコリはサハリンから引き揚げた人々が戦後につくったもので、当時は既に三味線の弦を使っていました。

(2) アイヌの人が作ったシナロープは、長野県から来たと書いてあったがどうなのでしょう。

⇒シナノキのロープは、もともと両方の縄文時代の遺跡からも出現するので、アイヌの人々と和人の双方にまたがって作られていたと考えます。

(3) オヒョウとイラクサの糸の作り方は。

⇒オヒョウは、幅1cm位に細かく裂いてから1本ずつ撚って糸を作っていました。イラクサは、北海道では秋に枯れたものをとり積み上げておき、冬に細かくしてから撚って糸を作っていました。寒ざらししなかったので、白くはなかったようです。

木の伐採時の儀式や熊送りの儀式から、アイヌの人たちの精神性にもふれていました。アイヌの人たちは、「人間の役に立つために自然（神）は存在する」考えていたこと。熊の神様が狩人を見込んで子熊を託したので、1年間大事に育てて神送りをすること。でもこれは、山の神や巨木を敬った昔の和人にも通用することではと思いました。たぶん、昔の日本人はアイヌの人々と重なった精神構造を持っていたのでしょう。春日会長さんが謝辞で、「講師の知識の探求過程に引き込まれてあっという間でした。講演中に笑いあり大変面白かった。」と述べられました。正に同感の貴重な講演会でした。講師の大坂氏、事前の準備等をしていただいた自然ふれあい交流館の皆さん、本当にありがとうございました。

<オヒョウの繊維>



<大坂氏自作の刀帯>

